北条新聞

No.7

北条新聞は北条住民と地域情報を共有する目的で北条街づくり振興会青年部会（通称：みんなの登校日）が発行する新聞です。記事はみんなの登校日メンバーや北条に関わりのある人にお願いをして書いていただいています。北条住民にもっと北条を知ってもらい、北条ライフを楽しんでもらうための情報提供をしていきたいと思います。

北条新聞を置いていただけるお店や場所、「こんな記事読みたいよ」も募集中！

NPO法人"矢中の杜"の守り人　事務局長　中村泰子

「矢中の杜が重要文化財になりました」

この秋、9月25日の官報告示により、矢中の杜は「旧矢中家住宅」として国重要文化財に指定されました。

茨城県による「近代和風建築総合調査」（2016年実施）を元に、2022年初夏、県内の複数の建造物の一つとして、文化庁の文化財調査官による視察がありました。同秋には、改めての視察調査があり、優れた意匠と学術的な意義を評価され、指定の検討が始まりました。2023年6月には、国文化審議会の答申により指定されることが決定し、その情報が公になりました。最初の視察があってから約1年のことでした。

2008年、旧矢中邸を新旧の所有者にちなんで、「矢中の杜」と名付け、保存活用活動が始まりました。2011年に国登録有形文化財に登録、東日本大震災や竜巻による被災をなんとか乗り越え、定期的な邸宅公開はじめ日常的な整備や修繕工事、邸宅の貸し出しなど保存活用のための活動をしてきました。そんな中での、今回の重要文化財指定。私たちもびっくりしています。

現在は新聞やテレビなどメディアにも取り上げられ、多くの方に興味を持っていただいています。旧北条小学生時代に「クリーン作戦」で矢中の杜の草取りをした経験を持った方も、立派な大人になって改めて訪ねてきてくれました。

往年の「矢中御殿」を知る方達、矢中家ゆかりの方達も続々と来場され、当時の様子を教えていただくのはとてもありがたいです。また、実際の建築に関わった職人のご家族の来訪は貴重な時間になります。棟梁を務めた保科菊次さんのご家族はじめ、職人の方から見た当時の思い出を少しずつ知ることができました。実際に職人として関わったご本人（90歳超！）の来場は驚きと嬉しさで大興奮となりました。

矢中の杜は前述の保科氏のほかは、北条や泉など、地元の職人さんたちの手によって建設されました。その建物が国にその価値を評価され、この地域の様々な職人技術の高さを見る思いです。北条地区の自慢の一つと言ってもいいのではないでしょうか。

指定文化財は、重要なものを厳選し，許可制等の強い規制と手厚い保護を行うものを指定する制度で、国が指定するものが「重要文化財」です。届出制で緩やかな保護措置を講じる登録文化財とはまた違った対応が必要になります。重要文化財に指定されたことで、長く保存する道が開かれ、大変心強いと同時に、必要な対応や設備、工事などが山積みで、非常に難しい問題にも直面しています。

もしかしたら皆さんも、矢中の杜に来る方達に、道を聞かれたりされているかもしれません、大変面倒なことだとは思いますが、どうかご協力をお願いいたします。そしてもし、少しでも興味が湧いてきたら、矢中の杜の見学にぜひおいでください。オリジナルグッズもありますし、活動への参加も大歓迎です！

矢中の杜は今、この街の中で、世代を超え、時代を超える「保存活用」が本格的に始まるスタートラインに立ったところです。

【邸宅公開】

毎週土曜日 11 時 ~16 時

お一人様 500 円

（中学生以下無料）

詳しくはこちら↓

https://www.yanakanomori.org

矢中の杜　思い出3題

田村哲三（北条出身、流山市在、郷土史家、作家、NPO流山史跡ガイドの会副理事長）

矢中の杜（旧矢中邸）が国の重要文化財に指定されたと知り訪れてみた。矢中邸は建材研究家の矢中龍次郎氏が建てたもので、770坪の敷地に建つ本館（居住棟）と別館（迎賓館）からなる。和洋折衷の建物は内装の豪華さだけではなく、いかにも建材研究家らしく通気や木造の陸屋根など他に類をみない建築様式である。そのためか50年もの間、無人でありながら建築当時の様子を現在に伝えている。昭和13年の起工から15年の歳月をかけて完成したと知るとまさに驚きである。矢中邸には幼少のころや中学生時の思い出がある。

写真提供：矢中の杜

5歳のころ　池の鯉と遊ぶ

矢中邸の起工は昭和13年である。その年の9月、私は両親の住む泉の地に生まれた。父泰造が大工として矢中邸の建築にかかわっていたことを思うと、なにか因縁めいていたような気もする。昭和17年、母屋の棟上げ式が挙行されたが、このときの写真が矢中の杜に2枚残されている。2枚の写真にはともに30人ほどの職人が写されているが、その中に父も写っていた。棟梁の一人は父の親方で裏掘に住んでいた鈴木銀次郎。銀次郎の長男が戦死したので私が養子入りする話まで進んでいた間柄であった。旧来の木造建築は棟上げから約1年をかけて完成させるのが普通であったから、完成は昭和18年とするのが妥当であろう。

話はそれてしまったが、邸の庭に降りたとき今は水もない池に目が留まった。その刹那、過ぎし日の思い出が蘇ってきた。ある日、私は父に連れられて矢中邸に入った。なぜ父に連れられて行ったかわからないが、家で母に用事があり父が仕事場で遊ばせようとしたのであろう。庭にはきれいな池があり真鯉や錦鯉が泳いでいた。鯉を追ったり、女の人から渡された餌をあげたり、石垣に蝋石で絵を描いて叱られたりしてひなが遊んでいた。庭からガラス戸越しに見た粋な旦那が龍次郎氏であった。

記憶は5歳ごろと思っていたが、母屋の完成が昭和18年とすると記憶と一致する。庭も完成していたことからも間違いないだろう。やがて北条の空にも米軍機グラマンやP51が飛び交ったが、その前の静かなひと時であった。

9歳のころ　町長選挙の思い出

昭和20年8月15日、太平洋戦争は終結した。その日から世の中は180度転換、それまでの軍国主義は民主主義に変わった。市町村も首長を選挙で選ぶようになった。昭和22年3月、北条町でも町長選挙が行われた。私は9歳、小学校2年生（3学期）だから町長選などに興味があるはずもない。それがある出来事により鮮明に記憶することになった。ある出来事とは、立候補者同士の喧嘩に遭遇したことであった。当時の選挙は、今のように選挙カーが候補者名を連呼するような騒々しいものではなく、いたって静かなものであった。

そのような選挙戦の最中、父と私は帰宅の道を歩いていた。小泉から泉に至る中ほどで、和装と洋装の二人の男が大声を張り上げて罵り合っていた。今にも掴み合いになりそうな勢いであった。洋装の男は矢中龍次郎、鳥打帽を被り編み上げ靴のハンチングスタイル。田舎では見かけることのない粋な姿であったが、その顔には精悍さが漂っていた。ときに69歳。和装の男は泉の稲葉多兵衛。本宅と呼ばれる泉の名家の主。ともに北条町長選に立候補していた。9歳の私にも両者が誰であるかはわかった。

大工を職とする父は両者ともにお世話になっていた。30歳ほど年下であったが2人から「泰ちゃん」と呼ばれていたから、それなりの信用があったのだろう。2人は「泰ちゃん聞いてくれ」と共に相手が悪口を言い選挙妨害しているという。父がどのように仲裁したかは記憶にないが、落ち着きを取り戻した多兵衛と龍次郎は泉と北条に分かれて帰って行った。もし父が通り合わせなかったらどうなっていたのだろうか。父は私に「このことは誰にも言うな」と口止めした。父がどちらに投票したか知らないが、噂の拡大が選挙に及ぼす影響を考えたのであろう。誰にも言わなかったことで、逆に鮮明な記憶として残ったのかもしれない。選挙は稲葉多兵衛が当選、16代町長に就任した。矢中龍次郎が落選したことについて、大人たちの話では、東京で成功した者への嫉妬や地縁のなさが災いしたと話していた。

中学時代　矢中邸に招待される

北条町は野球の盛んな土地柄であった。昭和13年の「いばらき新聞」には筑波山麓実業団野球大会の記事があり、北条チームが優勝したとある。実業団とは商店主などが集まったチームであった。記事には川村、稲毛、広瀬、森、飯塚などの選手名があるが、この人達によって北条中学校の野球部は鍛えられた。その人たちは授業の終わるのを待つかのようにグランドに陣取っていた。

私の中学時代は北条中学野球部の全盛時代であった。

写真提供：田村哲三

やがて現れた龍次郎はふくよかな好々爺で、かつて選挙時に見た精悍な顔つきとは違っていた。テーブルの菓子入れには饅頭が山済みされていたが、誰も手を伸ばさなかった。饅頭は土産として頂いて帰り両親に渡した。両親も喜んだが、野球部の活躍が表彰されたような高揚した気分になった。

矢中邸が完成したのが昭和28年で、私は中学2年生の15歳。完成した年に招待されたことを考えると、矢中邸の起工から完成に至る15年間は私の成長の軌跡と一致している。しかも父がその15年にかかわっていた事と合わせ、邸との縁を感じ感慨深いものがある。

筑波郡の大会では4連覇を成し遂げた。中1の時は県西大会も制し県大会にコマを進めた。下妻中、下館中、結城中、古河中などの強豪をなぎ倒した。練習試合では土浦中にも勝つなど破竹の勢いであった。私はそのような北条中学校の野球部に在籍した。1年時は補欠であったが2年時はセンターで6番打者、3年時はショートで4番を打った。町の応援もすごかった。筑波郡大会は谷田部高校のグランドで行われたが、深谷のトラックで会場入りした。ホロなしの荷台に全員が乗り込むのであった。

北条中学校のグランドの3塁側には小学校の坂道があり、その向こうは竹藪、そして矢中邸があった。練習中のファールボールは竹藪に打ち込まれたが、大きな当たりは矢中邸に飛び込んだ。そのボールを探すのは1年生の担当だった。貴重なボールを失うわけにはいかない。ボール探しに時には矢中邸に伺うこともあった。そのような行為を龍次郎がどのように思っていたかは知る由もない。

ある日、北条中野球部の活躍にことのほか喜んだ龍次郎は、野球部を邸内に招待してくれた。案内された部屋は洋間であった。ふかふかの椅子に座るなど初めてのことで、部員は緊張に固まっていた。

北条新聞のタイトル背景

今年度の北条新聞のタイトルの背景に使用されている模様は、北条にあった染物屋さんで使用されていた型紙をスキャンしたものです。現在は染色工房『ぷにの家』さんが維持管理をしてくださっています。今回、ご厚意で貸していただきました。　ぷにの家 HP：https://www.puninoie.com/

みんなの登校日。 HOJO IN TSUKUBA

ホームページ
https://minnano-toukoubi.localinfo.jp

メール QR コード
minnano.toukoubi298@gmail.com

Youtube　Facebook　Twitter

ご意見・ご要望はメールまたは、お手紙で

〒300-3292
茨城県つくば市筑穂 1-10-4
つくば市大穂庁舎２F
北条街づくり振興会事務局　まで

発行：北条街づくり振興会青年部会
発行日：2023 年 12 月 15 日

筑波山ゲートパークがオープンしました

11月3日に旧筑波東中学校跡に筑波山ゲートパークがオープンしました。オープニングセレモニーには五十嵐立青つくば市長をはじめ、筑波山地域ジオパーク6市（つくば、石岡、笠間、桜川、土浦、かすみがうら）の首長（石岡、笠間は代理出席）や、茨城県選出の衆議院議員、茨城県会議員、つくば市議会議員の他、たくさんの関係者が集まり、報道関係者の見守る中テープカットが行われました。

筑波山ゲートパークは、2018年に廃校になった旧筑波東中学校跡に、筑波山地域ジオパークの中核となる体験型展示施設「つくばジオミュージアム」と、世界基準で設計され、国際大会基準を満たした国内最高峰のBMXコースや、レンタサイクル、シャワー室、休憩スペース、整備なども行える自転車施設「サイクルパークつくば」が併設された施設です。

ジオパークのジオは「大地」、パークは「公園」を意味する言葉で、科学的に重要な、または貴重な地質遺産がある自然公園のことをジオパークと呼びます。ただ、単純に地質や地形のことだけではなく、大地や自然、それと結びついた人間の暮らしまでを含めて学び、楽しむことができるのがジオパークです。

ジオミュージアム展示室

筑波山地域ジオパークは、石岡・笠間・つくば・桜川・土浦・かすみがうらの6市から構成されていて、筑波山をはじめ、霞ヶ浦や関東平野を含めたジオパークです。筑波山は火山のような形をしていますが、約8000万年～6000万年前に、マグマが地下深くで、ゆっくり冷えて固まることで出来上がった岩石が、長い時間をかけて隆起した山です。その岩石が風化や浸食されることで土石流がおこり、なだらかな山麓の形が形成され、現在の美しい山の形になりました。

茨城県はみかん栽培の北限、りんご栽培の南限といわれますが、筑波山はその北限みかんの栽培地でもあります。なぜ筑波山で、温かい地域の果物であるみかんが、麓ではなく中腹で栽培できるのか？というと、冬季におこる斜面温暖帯のおかげだといわれています。通常であれば、標高が上がるほど気温は下がります。しかし斜面温暖帯によって山麓よりも中腹の気温が高くなるためみかんの栽培が可能になるそうです。

こういった地形や地質、その影響を受ける自然、そして自然から恩恵を受けて営みをおこなってきた人間との関連や歴史、文化などをわかりやすい展示物を通して学ぶことができる施設が「つくばジオミュージアム」です。

北条をはじめ、筑波山麓地域が自転車と相性が良いことは北条新聞No・5&No・6でも取り上げてきましたが、つくば霞ヶ浦りんりんロードと筑波山地域の峠道という平地も坂もあり、ゆっくりサイクリングも、がっつりトレーニングも楽しめ、近隣に美味しいごはん屋さんもあることでサイクリストにとって魅力的なエリアになっています。「サイクルパークつくば」のオープンをきっかけに筑波山麓エリアがさらに盛り上がっていくことが期待されています。

BMXは「Bicycle Motocross（バイシクルモトクロス）」の略で1970年代にアメリカで始まったと言われ、2008年にはオリンピック競技に認定されました。BMXにはジャンプ台や凹凸のあるコースを走る「レース」と、アクロバティックな技を競う「フリースタイル」の2つの種目があり、「サイクルパークつくば」に完成したものは「レース」用のコースになります。

弱虫ペダルのラッピングバス

北条には広い駐車場がないことが長年問題になってきましたが、筑波山ゲートパークに車約200台を駐車できる駐車場が出来たことで、自転車だけではなく、北条から宝篋山、つくば道を筑波山まで登る登山や、北条～平沢～つくばワイナリーと街歩きの拠点としても活用されそうです。

自転車とジオパークの拠点が一緒になっていることで、ジオミュージアムで地域や地形について学習した後、サイクルパークで自転車をレンタルし、近隣のジオサイト（ジオパークのみどころ）を回るジオサイクリングも開催しやすくなりました。そういった地域資源を活用した観光の拠点にもなる可能性もあり、「筑波山ゲートパーク」は、地域発展の原動力になってくれるかもしれません。

レンタサイクル

地域のみなさんに施設を体験してもらうためのイベントを開催します!!

みんなの登校日　2024
「筑波山ゲートパーク体験イベント」
2024年2月24日（土）10:00～15:00

- ジオミュージアム見学
- BMX 体験
- マルシェ
- ジオサイクルツアー
- 座談会

北条のむかしばなし

第七回　八坂神社

このシリーズは郷土史家、井坂教貴さんによる北条の歴史をたどるおはなしです。

北条の街の成り立ちについて触れたからには、次に鎮守八坂神社のことを話題にしなければならないだろう。

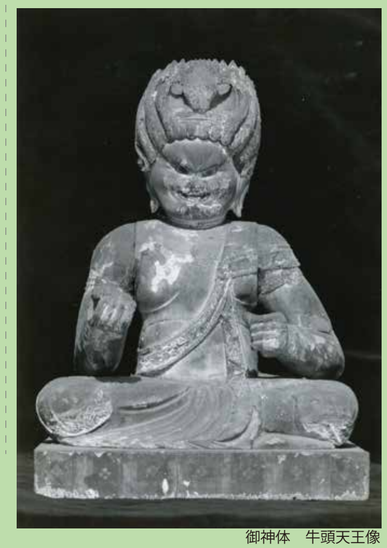
伝説によれば、神社は平安時代に八幡太郎義家（よしいえ）、あるいはその父頼義（よりよし）によって創建されたといわれる。残念ながらこれはありえない。そこまで古くにはさかのぼれない。

ただ、室町時代の十五世紀頃にはすでに存在したと思われる。神社の立地する小丘（たぶん古墳）の前面に、かつて吉祥院という寺があった。神仏習合の時代には、この寺が別当（べっとう）として神社を仕守（しも）りしていた。この寺に天文六年（一五三七）造立の五輪塔があった（連載第一回参照）。神社と寺とは一体であるから、両者は同時に存在していたことになる。

八坂神社全景

話は飛ぶが、明治時代に政府から廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）の命令が下されて、吉祥院は廃絶し、寺の住職は神官になった。この時境内にあった五輪塔が移されて、今は社殿のかたわらに置かれている。

では、近世の八坂神社はどう推移したのか。この連載の第四回で述べたように、北条の区画整理事業が行われて、街並みが整い、商売も順調にすべりだしたのは寛永十年（一六三三）頃であった。そこで中町が中心になって鎮守の社殿を新しくしようとする動きが起こっただろう。街の安全と繁昌を守ってくれるように、鎮守の立て替えを考えるのは、当然の成り行きであったからである。しかし内町・新町はまだ財政的余裕がなくて、この話しにのらなかった。そのため中町はその年の九月に横町に独自に板碑を造立して、中町の商売繁昌を祈願した。


御神体　牛頭天王像

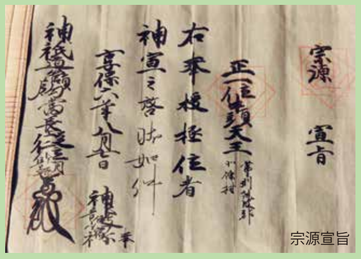
中町はその後も、三町が一致協力して社殿を新造することを、内町・新町に催促（さいそく）したと思われる。そうして再三再四協議をくりかえした結果、ようやく社殿が造営されたのは寛永の十二、三年のことだろうか。

この時の社殿は茅葺（かやぶき）の簡素なものだったろう。現存する御神体の牛頭天王（ごずてんのう）像は、この社殿に奉安された。寄木造（よせぎづくり）、玉眼で、全体に胡粉下地（ごふんしたじ）を厚く塗り、華麗に彩色されている。専門仏師の手になるものであり、威厳と気品を備えているところは、寛永期の作としてよいだろう（参考：つくば市教育委員会『筑波の文化財板碑・補遺篇』）。

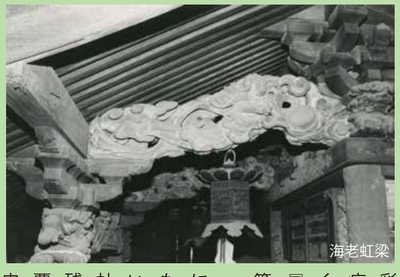
寛永の造立から約八十年を経て、茅葺の社殿は老朽化した。そこで再建されたのが今の社殿である。それは享保三年（一七一八）のことであった。

本殿正面

その証拠は『北条町諸旧記』に棟札の写しとして、この年号を記し、また社殿高欄（こうらん）の擬宝珠（ぎぼしゅ）に「享保三年　別当吉祥院」と彫ってあることからも明らかである。その後、社殿改築を記念して、享保六年には京都の神祇管領（じんぎかんれい）吉田家から正一位の宣旨（せんじ）をもらいうけた。正一位というとたいそうなことにきこえるが、吉田家に金さえ払えばいくらでも発行してくれるもので、それほどありがたい話ではない。


宗源宣旨

享保の社殿は柿葺（こけらぶき）で、彫刻を多用する華麗なつくりである。正面向拝（ごはい）の頭貫（かしらぬき）に波を彫り、その上に龍の丸彫りをすえる。向拝と身舎（もや）をつなぐ海老虹梁（えびこうりょう）には、右に金鼓をたたく天女、左に笛を吹く天女を瑞雲の中に配する。身舎には全体に地紋彫（じもんぼり）を施し、壁面三面には中国の故事にもとづく彫刻を彫り出す。ここまでやるのかと多少アキレハテルのは、頭貫の飾り金具を模した彫刻である。木材から三分ほども高く掘り出している。ところどころに彩色（さいしき）の痕が残る（参考：つくば市教育委員会『筑波の文化財建築篇』。


海老虹梁

本殿身舎

なお、この時同時に覆屋（おおいや）も建てられたらしい。そのため享保の社殿が今もなおよく残っている。現在の覆屋は『北条町郷土史』によれば、明治九年（一八七六）十一月三日に再建されたものである。